

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第29回)

ナショナルリズム

1989～90年、夫婦揃ってロンドン大学に留学していた時に住んでいたフラットは、キルバーンという街にあった。ちょうど年が明けた頃から、街の様子が一変した。ハイストリート沿いにやたらと緑と白とオレンジの三色旗が掲げられたのだ。そう、アイルランド共和国の国旗である。そして、この年開催されるワールドカップサッカー・イタリア大会にアイルランドも出場することが決まったのだ。そうか、この街はアイリッシュの街だったのか。

「キル」(kil)というのは、教会の土地、墓地、木立ちなどを表すアイルランドの言葉で、キルデアやキルケニーなど、これのついた地名がアイルランドにはいくつもある。ロンドンのこの街も、もともとアイリッシュコミュニティが築き上げたのだろう。ワールドカップがなかったら、そして、アイルランドが出場していなかったら、気づかずに終わっていたかもしれない。

だが、申し訳ないが、イギリス文学を学び、イギリスに憧れてイギリスへやってきた身としては、当然、イングランドを応援することになる。せいぜいテレビ観戦するだけのことだが、イングランドは順調に勝ち進み、こちらの気分も日毎に昂揚していった。が、余り歓喜の声を挙げてはご近所の手前、気まずいので、できるだけ静かに応援していた。

ドイツとの準決勝の日（当時はベルリンの壁が倒れたばかりで、このときの出場チーム名はまだ「西ドイツ」だったが）、なぜか手に入れてあったローリング・ストーンズのコンサートを見に、なぜかフットボールの聖地ウェンブリースタジアムに行くことになっていた。本当は、家でテレビを見ていたかったのだが、夕方4時ごろからスタジアムのアリーナ席に座っていると、なかなかローリング・ストーンズが出てこない。前座バンドが入れ代わり立ち代わり演奏をするばかりである。夏だとは言え、時間が遅くなるとかなり冷えてくる。3時間ぐらいてしょうやくローリング・ストーンズが出てきたところで、妻と顔を見合わせ、「よかったねえ…」と言いつつも、すっかりテンション（と体温）が下がり、それとなくお互い合意の上で、途中退出して家に帰ることにした。

こうして見られた準決勝、残念ながらPK戦の末イングランドは敗れたが、実に見ごたえのあるいい試合だった。翌日、大学でイギリス人のクラスメートに「残念だったけど、いい試合だったね、ローリング・ストーンズのコンサートを途中で放棄してでも見る価値はあったよ」と言うと、「なんてことをしたんだ…」と呆れられてしまった。彼は音楽のほうが好きだったのか、それとも、試合の結果によるものか、何とも言えない。